

教育学部生における性的マイノリティ（LGBTQ+）に対する意識調査

—男女両性愛者に注目して—

三木 祐香（香川大学）

1. 目的

性的マイノリティとは、「身体の性別と性自認（自認している性）が一致していること」かつ「性的指向（好きになる性）が異性であること」に当てはまらない人のことを指す。性的マイノリティを表す用語として「LGBT」が用いられるが、多種多様な性を4 類型だけで表すことは難しいため、本研究では「LGBTQ+」を用いることとする。同性愛やトランスジェンダーに対する意識は三上・井谷（2018）が明らかにしている。

そこで本研究では、教育学部の学生における性的マイノリティの現状、性的マイノリティに対する認知度、男女両性愛者に対する意識等について明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

前述の三上・井谷の研究を参考にして、全30 項目の質問を設定した。

- 1) 調査対象：K 大学教育学部の学生 130 名
- 2) 調査方法：質問紙調査
- 3) 分析方法：「身体の性別（戸籍）、性自認、性的指向」が「男性、男性、女性」であれば規範的男性、「女性、女性、男性」であれば規範的女性と定義し、SPSS version26 を用いてクロス集計及び χ^2 検定を行った。

3. 結果と考察

1) 対象者の属性

対象者の性的指向を表1 にまとめた。

表1 対象者の属性

異性愛	82.3%
異性愛以外	17.7%

また、「大学在学中に性的マイノリティに関して知識や情報を得る機会があった」と回答した人（以下情報あり）は70.8%であった。

2) 性的マイノリティを表す言葉の認知度

LGBT について「言葉も意味も知っている」と答えた人は76.2%だったのに対し、Q+について同様に答えた人は26.2%であった。

3) 男女両性愛者に対する意識

男性の両性愛者から「興味を持たれる」、「交際や性的な関係を迫られる」のはいやであると回答したのは規範的男性に多かった。「友人に女性の両性愛者がいても、いやではない」、女性の両性愛者から「性的な関係を迫られる」のはいやであると回答したのは規範的女性に多かった。

4) 学習意欲、LGBTQ+の子どもに対する意識

「性的マイノリティに関する授業や講演を受けてみたい、自分で調べようと思う」と回答した人は情報ありに多かった。情報入手の機会の有無に関わらずLGBTQ+の子どもへの対応を不安に思わない人が多かった。

4. 結論

- ① 教育学部には性的マイノリティの学生が若干名存在した。
- ② LGBT 以外の性の在り方についての認知が進んでいないことが判明した。
- ③ 規範的男性及び規範的女性は男女の両性愛者を心理的な距離で判断している可能性が示された。
- ④ 性的マイノリティに関する情報を入手することは、学習意欲を高めることにつながると考えられる。しかし、情報入手の機会とLGBTQ+の子どもへの対応を不安に思うかどうかは関係しているとは言えない。

5. 主な参考文献

- 1) 三上純・井谷恵子（2018）教員養成課程の学生における性的マイノリティに関する知識と意識についての研究, スポーツとジェンダー研究 12:68-79